

緑爽会会報 No. 159

2018年12月25日発行

日本山岳会 緑爽会

発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～

10月例会/講演会報告「自然エネルギーに関わって35年 (現状の課題点を含めて)」

開催日：10月29日（月） 18時～ 104号室

講師：森武昭会員

出席者：16名（会員外2名一写真参照。田村佐喜子さんは写真に写っていません）

冒頭、富澤代表より、森会員との接点について話があった。富澤代表が入会したのは1996年。その頃、森会員は科学委員会委員長で、一緒に行かれた委員会山行での安達太良山、中央分水嶺である湯ノ丸高原山行が印象にあるとのことであった。

講演はパワーポイントを使用し、映像を見ながらスタートした。最初に山小屋での自然エネルギー発電の事例が紹介された。

太陽光発電はすでに34～5年も前から試みがなされており、条件の厳しい山中で各小屋では工夫がなされていた。しかし一言でいえば、保守が不要で、一定の発電量が予測可能との長所はあるものの、一方、短所としては、広い面積が必要であること、バッテリー技術革新とコストダウンという課題もあること、との説明であった。



＜パソコン操作し説明する森会員＞

風力発電については山小屋のみならず、各地で大型の発電設備が設置されているが、発電量の変化が激しく、環境面でも様々な問題がある。コストを追求すれば大型化とならざるを得ず、それは環境問題となるジレンマがある。洋上など場所が限定され、山小屋では保守を含め問題が大きいとの私見が示された。

さて水力発電はというと、流量が確保されれば常時安定した発電量を得られるメリットがあるが、立地条件に限られ、落ち葉や砂などの対策が欠かせない、とのことである。ただ今後増える可能性は大きい。その最大の課題は水利権だとのこと。

続いて、発電量に占める自然エネルギー発電の割合の推移など、いくつかのグラフにて我が国の電力の現状が示された。まだまだ火力に依存している状態ではあること（70%以上）、自然エネルギーの中では太陽光が主であること、などが説明された。その太陽光に関しては、2013年以降、固定買取制度となっているが、買取枠の認定を受けても稼働しない設備が急増しているとの指

摘があった。

最後に今後のエネルギー問題への対応策について語られた。言葉が難しいが以下の諸点である。まず、家庭レベルでは、節電の徹底、省エネの徹底、創エネの主体は太陽光発電、蓄エネは電気自動車の有効活用、システムとしてのスマートハウス（HEMS）の導入、の対応が必要で、そのうえで、地域でのエネルギーシステムの構築が必要、という。

＊スマートハウスとは、家庭のエネルギー管理システムで、家電・太陽光発電・蓄電池・電気自動車を一元的に管理するシステムを備えた住宅の意味である

そのキーワードは

1. エネルギーの地産地消が基本
2. 中核となる創エネはメガソーラーと小水力発電
3. システムをスマートグリッドとして効率的に制御

＊スマートグリッドとは、電力を供給と需要の両面から制御し、最適化する送電網の意

4. 過不足分を電力会社と充電・買電とする（時給自足型の開発）

その後質疑応答があり終了した。

講演の数日後の新聞で太陽光発電に関し、稼働しないまま利権が投機的売買されているとの記事があった。また日を空けず、アメリカでは自然エネ革命進行中との見出しがあり、講演を受けたおかげで、記事の理解も進んだ。今や電気なしでは生きていけない。しかしそれは自然環境を破壊していることでもある。一人一人が考えなければいけないことであるといまさらながらに痛感した。なお、講演の中では山研の発電システムについても説明があった。参考資料として会報「山」657号も配布された。資料がご入用の方は荒井までお知らせください。（荒井記・写真とも）



（後列左から）小清水敏昌、小林敏博、鳥橋祥子、川口章子、瀬戸英隆、夏原寿一、須藤節子、神山良雄、荒井正人
（前列左から）平野紀子、渡部温子、松本恒廣、梨羽時春、森武昭、富澤克禮、渡邊貞信

10月例会の講演を拝聴して

小林 敏博

10月例会で日本山岳会前会長森武昭氏の講演を拝聴しました。

35年前に設置した穂高岳山荘の太陽光パネルは屋根に対して15～20度の傾斜をつけていたが、風圧荷重の問題で改修したこと、蝶ヶ岳山荘に設置した風力発電は計画の10分の1ほどの発電能力でトイレの電球を灯す程度だった、八ヶ岳夏沢鉱泉では背後が山の斜面のため想定通りの風が得られず今は水力発電を利用している——など、環境にやさしい自然エネルギーの効率的な利活用が当時はいかに難しく、半ば試行錯誤されたことを大変興味深くうかがいました。また、山研を例にあげて常時安定した発電量を得ることができるという小型水力発電は取水の際の落ち葉、砂対策が必要とのことで、この夏、山研で明るい夜を楽しく過ごした自分としてはそのような関係者の苦労も知らず、講演を聞きながら改めて心の中でこれらの方々に感謝をしました。

自然エネルギー発電は固定買取制度の導入によりここ10年、太陽光を中心に大きく伸びてきたとのことですが、買取価格の漸減等により買取枠の認可を受けても稼働しない（設置しない）設備が急増しているという。山梨県を含めて東京近郊の山を歩くと、突然大きな切り開きに遭遇し、目の前の斜面に大きく広がる太陽光パネルにびっくりしたことがいく度となくあり、買取価格がさらに下がる可能性があるとするれば、これらの設備は今後どうなるのだろうかなどと素人ながら心配になってしまいました。

講演の最後はエネルギー問題の対応策についてお聞きしましたが、「平地で取り組んでいることは、山小屋ではすでに実践済み。山小屋から学ぶことが多い。」ということなので今度、シーズンを外して山小屋に泊まり、この視点から山小屋を眺め山小屋生活を経験し小屋番さんから話を聞いてみようかと考えています。

11月山行報告「大鹿峠越え」

実施日：11月20日（火）

参加者：6名（写真参照）

武田一族終焉の地である景德院から峠道を辿り、曲沢峠方面に繋がる鞍部に出たら大鹿山のピークを越えて大鹿峠に出る。のち笹子に下るというコースで、紅葉も期待できるかと思ったが少々遅かった。ロッジ山旅の長沢会員が参加することとなり、タクシーを予定していた甲斐大和から景德院、道証地蔵から笹一酒造の両区間、ロッジのマイクロバス・山旅号のお世話になりました。ご厚意に甘えさせていただきました。

前夜遅くまで雨が降っており、天気が心配であったが何とか晴れた。これなら樹間から山々も見えることだろうと期待に胸が膨らんだ。しかし中央線沿いは深い霧に包まれていて不安もよぎる。それでも心がけのお陰か、雨の気配はない。一部粘土質で滑るところや稜線近くで急な登りもあったが、この時期の山歩きとしては上等の部類で、何より誰にも会わなかったことが嬉しかった。

笹一酒造は「ささいちフェア」という新酒祭りでも土日でもなかったので閑散としており、すでに食べ物も終了。缶ビールでささいち、いや、ささやかな祝杯を挙げ、すぐに車中の人となった。長沢さんありがとうございました。（荒井記・写真とも）

大鹿峠

長沢 洋

荒井さんがリーダーになって、田野から大鹿峠を越えて笹子へ下るといっているので参加することにした。というのも自分が担当しているガイドブックに大鹿峠から田野に下るルートがあるので、たまには峠道の様子を見たかったからである。ひとりで行くのは億劫だが、人の計画に便乗できるなら身も軽い。

私の住む八ヶ岳南麓の上空は青空だったのに、東に行くにしたがって雲が多くなった。 甲斐大和駅で首都圏からの方々と合流、駅での会話で「初鹿野」と旧駅名がつい出て、当然そちらに親しみのある年齢の方々ばかりだから、馬鹿な改名をしたものだとしきり盛り上がった。

総勢六人が私の車で景德院の駐車場に移動し、まず参拝してから山歩きとなった。あたりはちょうど黄葉が盛りで山門脇の紅葉も美しい。

田野からは尾根通しに二本、沢沿いに一本のルートが間をあけずに並行して主稜線へと通じている。たまたま地形がそうだからといえればそれまでだが、それらが、甲州街道の大道が越える笹子峠の間道であったことを考えると意味ありげにも思えてくる。

大鹿峠への道は最南の尾根にあるが、今回登りにとったのはその北側の尾根だった。深く掘られた部分もあって、かつての木曳道かと思われた。主稜線が近づくと広葉樹の林はすっかり裸になっていたが、足元を埋めた落葉にはまだ色が残っており、いかにも初冬の風情である。稜線には立派なブナやミズナラが多く、新緑のすばらしさが想像された。

この日の最高点大鹿山は縦走路をはずれてひと登りだった。一番高いところには何もなく、少し低い、三角点のある場所に標識があった。ここでちょうど昼となった。

昼食後に下り着いた大鹿峠は西側の崩壊が進んでいるので景色を眺めるにも少々足元が危ない。甲府盆地の果てに見えるはずの南アルプスにはあいにく雲がかかっていた。



左から、荒井正人、渡邊貞信、夏原寿一、長沢洋、富澤克禮、小林敏博

ここから私は車の回収と峠道の様子確かめる目的のために

景德院に戻る。稜線上に何基も建つ送電鉄塔がやたらと目立ったことを覚えていたが、それは四半世紀も前の伐採後間もない頃の記憶で、今ではすっかり様子が変わっていた。民家の庭を通らせてもらおうといった感じで里に出たのは前と変わらない。

車を笹子側に回送して道証地藏で峠越え組と合流したのち、最終目的地の笹子酒造にお送りした。運転がある私はそこで皆さんとお別れである。したがって、その後のお楽しみの様子については残念ながら書くことがない。

私の敬愛した長老たち＜その３＞

関塚 貞亨

１８８８年、W・ウェストンは英国国教会宣教師としてロンバーディ号で３月３１日長崎寄港、４月１日神戸港に到着して初めて日本の土を踏んだ。それから１００年経った１９８８年に、ウェストンゆかりの横浜アンデレ教会および横浜山手聖教会が主催、日本山岳会が後援して、来日１００年記念祭が３月２１日、横浜アンデレ教会で開催された。

アンデレ教会（正式名はセント・アンドリュース教会）は、日本人の信者が増えて、在留英国人のための山手聖教会に入りきれなくなったこと、一部に日本人と同席を嫌う英国人がいたことなどから、下町の寿町に日本人だけの横浜アンデレ教会を建てた。ウェストンも山手牧師館から通って説教していた。

ウェストンは１９１５年に帰国。１９４０年３月２７日にロンドンで亡くなった。享年７９歳。そして翌年に太平洋戦争がはじまり、１９４５年に寿町の教会は空襲で焼けてしまい、１００年祭は戦後三ツ沢に再建された横浜アンデレ教会で開催されることになった。後援する日本山岳会から、ウェストン研究の一人である島田巽さんより、三ツ沢在住の私に記念祭開催の準備をするように依頼があり、教会のウェストン研究の権威である垣内茂牧師と山岳会会員の安江安宣岡山大学教授を紹介された。

垣内牧師によると、ウェストンは山岳会とは逆で、日本人の信者の評判は芳しくなかった。そのことは『山岳』第１０８年の「大正２年夏、上高地」で少し触れたが、詳細は別の機会にしたい。ウェストン研究については『山岳』第８２年～第８３年に川村宏・三井嘉雄・安江安宣によるW・ウェストン年譜が詳しい。

前書きが長くなったが、安江さんを書く上で必要と思った。

◎安江安宣（１９１４年～１９９８年）

昆虫と岩魚の権威であり、初めてお会いした時は「ウェストン年譜はどのような作業で作成されているか」を伺うことから始めた。そして研究は大げさな言い方をすれば「藁の中から針を探す」作業の連続により完成するものだと思い知った。

古い名簿が見つからず、お住まいは何处か確認できなかったが、横浜中区の大栈橋近くにある旧英国領事館跡の資料館に通いつめ、膨大な資料からウェストンの記載を探すのだと聞いた。年譜作成作業の一例で、ウェストンの初来日が何時かは不明だったが、「会報」４７９号３ページに島田巽さんが「吹田市在住の川村さんが長崎で発行の英字新聞の１８８８年４月４日付け紙面に『長崎着の船客名簿に１等船客のウェストン師』とあるのを見つけた」と書いておられる。

『山岳』のウェストン年譜は３人の驚くべき努力と、緻密な作業によって完成したものだ。安江さんは残念なことに事故によって亡くなってしまわれたが、ウェストン来日１００年記念祭で知己を得た故安江氏と川村、三井両碩学に限りない敬意を払っている。

なお『山岳』第９４年に梅棹忠夫・水野勉両氏が安江氏の追悼を書いている。

◎榎藤太郎（1917 年～1995 年）

元福岡支部長の榎藤さんに初めてお会いしたのは山研だった。その日上高地は小雨で、直径 30 センチほどの折りたためる 6 本骨の洋傘状のものを帽子のようにかぶっておられ、その珍しい帽子が印象に残った、うろ覚えだが岐阜大学の大内教授と一緒にだったと思う。

その時は、雑談に類する「山に持っていくインスタントコーヒーはネスカフェよりドイツのクライスがましだ」というような話をしたことを覚えている。あるとき、山内のピッケルを見せてくれた。それは後期の作で、ニッケルクローム鋼のピックが少し細身の美しい業物であった。

ナムチャバルワのベースキャンプへのトレッキング途中で体調を崩されて、小倉厚さんに付き添われラサから引き返されたのは残念なことであった。

追悼は『山岳』第 90 年に後を継いだ深田泰三前支部長が書いている。

◎中尾佐助（1916 年～1993 年）

ドイツ文学者の池内紀の著書『2 列目の人生』に日本山岳会から 2 人、1 列目小島鳥水～2 列目高頭式、同じように今西錦司～中尾佐助が取り上げられている。異論があつて「中尾は農学者として 1 列目で、断じて 2 列目の人ではない」という意見がある。活動は多彩だが人付き合いは下手だったし、今西錦司、桑原武夫などとの重鎮とも論争した。

それでも今西錦司は 1952 年のマナスル偵察隊、1953 年のマナスル科学調査隊の隊員にその学識を評価して中尾を選んでいる。そして本州中西部、中国雲南省、ネパールの照葉樹林を観察し、有名な「照葉樹林文化論」を称える。ジャーナリストとしても一流になる人で、ロマンチストであったと思う。

お会いしたのは一度だけだ。1985 年 10 月、中野サンプラザでネパール協会と日本山岳会の共催で開かれた「ヒマラヤのエコロジー」に講師として参加されたときである。ほかの講師は川喜田二郎、渡邊兵力という錚々たるメンバーだが、記憶に残っているのは中尾さんの話だけだ。それだけ鮮烈なスピーチだった。そのことは『山岳』第 105 年の「日本山岳会と自然保護の流れ」で触れているが、再録すると、「中央アジアなど水の少ない地域の牧畜文化について、彼らは羊の数が多いいことを豊かとし、誇りに思っている。したがって、水に対して目一杯羊を飼うから痩せていて乳の出も少ない。そこで善意の外人が新しく井戸を掘り、羊を増やさないで飼えば、羊も太り乳も一杯出ると教えても聞いてくれない。水が増えれば羊の数を増やし、相変わらず貧弱な羊を育てるだけである。不合理でもそれが彼らの文化なのだ」。大体そのような話であった。シンポジウムのあとのパーティーで「感銘を受けた」と話しかけたが、嬉しそうな顔もしなかった。

一冊 1 万 5 ～ 6 千円と高価な『中尾佐助全集』全 6 巻は京都大学ではなく、農学の本流「北海道大学図書刊行会」が発行している。

親しい友は梅棹忠夫だが『山岳』第 89 年に川喜田二郎が追悼を書いている。

◎板倉勝正（1915 年～1992 年）

オリエント学の泰斗・中央大学の板倉教授は、松方三郎、榎有恒、三田幸夫ら学習院、慶應登高会の人たちが大島亮吉とともに追想する、1923 年 1 月 17 日に亡くなった板倉勝宣の甥である。勝宣は甥の勝正を大変可愛がっていて遺稿集『山と雪の日記』の中で「マサチャマ」として登場する（会報『山』327 号）。その一端を勝正さんが書いた「博物館」では、次のような書き出しで表わしている。

「私は小学校に通いだす前に博物館に通っていた。一緒にいた叔父が上野の図書館にゆく時、三度に一度はついてゆく。すると私を向かいの博物館にほうり込んで行って終う。広い館内は人影もなく、時々守衛の靴音が高い天井に響くだけである。私は大抵ミイラのあたりで遊んでいる。午になると叔父が迎えにきて芝生で一緒に弁当を食う・・・」

私にとって、1987年から1989年までの3年間、大隈公園完之荘で開かれた第29回から31回有志閑談会の世話役を務めたとき、列席する長老たちを前に、委縮しないように真ん中に座って「同じ仲間だよ」というように優しく微笑んで励ましてくれた「有り難く懐かしく忘れがたい人」である。

板倉教授は会報『山』333号に「ワンデー由来」として次のように記している。

「本来のワンデーは勝宣叔父の上の勝敏叔父が英語の達人で、中学の英語の授業時に、えらく気取って『ワンデー！』と言ったので綽名となった。したがって勝宣叔父は本来『ワンデーの弟』、時には『ツーデー』と呼ばれたこともあったようだが、ワンデーを知らない人が『ワンデーの弟』と呼んでもピンとこない。こうして北大入学以後、山仲間の間では勝敏叔父の綽名を僭称して、勝宣叔父がワンデーになってしまったのである。」

緑爽会の幹事だった近藤緑さんが、板倉教授が存命中に「オリエントの泰斗」を呼ぼうと企画したが、実現できなかったのは残念なことであった。

『山岳』第88年に教え子の小林政志現会長が追悼記を書いている。

老いの周辺

近藤 緑

その（1）

9月の末、何年ぶりかで上高地を訪れることが出来た。私が「もう一度、行ってみたい」と言ったら、自然保護委員長の川口章子さんが直ぐ山研管理人の元川里美さんに連絡してくれて、日程の調整から乗車券の手配まで全てお任せ。トントン拍子にコトが運んで、私自身は何の苦労もなく「山研」の人となった。

同宿の人々に顔見しりはいなかったが、関西支部の人達と知って、今も現役で頑張っている宗實慶子さんの名前を出すと、身傷者の私にも暗黙の敬意を示してくれた。（宗實さん、感謝します）。

滞在中は、快晴とは言えなかったが、小雨の中を散策した。晴れ間には穂高連峰も見え、霞沢や焼岳もしっかり顔を見せてくれた。雨で水嵩を増した梓川の瀬音が私を歓迎してくれるかのようだった。河童橋周辺の賑わいは予想以上だったが、懐かしい西糸屋までくると、静かな佇まいだった。ここを初めて訪れたのは昭和32年、私どもが結婚した年だった。引退した宿の先代・奥原教永さんも、まだ若かった。

私のようにシルバーカーを押す人は皆無で、一人だけ車椅子の男性を見かけた。押しているのは孝行息子か、それともヘルパーさんか。とにかく恵まれた老境の人に違いない。水たまりを除けながら辿るウェストン碑までの道のりが、これほど遠かったとは。「まだ歩く？」と私を気づかう同行の川口さんに、「もう、限界」と答えて、公園の椅子で一休み。正面の霞沢に思いを巡らせた。

翌日の帰途、松本で田村佐喜子さんの歓待を受けた後、列車を途中下車して、申訳程度に塩山の施設の夫を見舞ったのだが、「上高地に行ってきた」とは、可哀そうで告げることは出来なかった。

帰宅して、着いたばかりの会報「山」を見たら、編集後記に節田編集長が山崎安治・近藤信行の小島烏水「霞沢調査山行」のことに触れていて、嬉しかった。私も霞沢を眺めて同じことを思っていたので。

川口さん、元川さん、田村さん、お世話になりました。今生の思い出を有難うございました。



＜ウェストン園地からの霞沢岳＞（撮影：夏原寿一）

その（２）

手術後の脚の経過が悪く要介護者となった私は、週に一度、入浴サービスの施設に通っている。病院に併設されたこの施設は、リハビリ目的の施設とは違って、もっと高齢の人達の集会場所になっている。そこで会う男性のＹさんは、９０歳を過ぎても頭脳明晰、どんな脳トレの課題にも誰よりも先に回答する。

例えば歴史上の人物の似顔絵を見せて「これは誰？」と問いかけるテスト。それが紙幣に印刷された野口英世や樋口一葉なら即答出来ても、岩崎弥太郎、西郷従道、チャンドラ・ボース、ライシャワー大使やマイケル・ジャクソン・・・矢張り早に出されると「エー？」と詰まって出て来ない。そんな時、パッと応ずるのがＹさんだ。筋トレで「その姿勢で２０秒キープして」などと理学療法士さんから言われる時、じっと時計の秒針を見ていて、「数え方が早いよ」と可愛くないクレームをつけたりもする。頭だけでなく、まだ杖も使わずに自力で歩けるのにも敬服する。

そのＹさんが、同乗する送迎車の中で、「自分は２・２６事件に兵隊で参加したため、北満に飛ばされた。ノモンハン事件で生き残った後は樺太警備に当り、終戦でやっと帰れると思ったら青函連絡船『洞爺丸』が沈んで九死に一生を得た。沢山の人が海底に沈んだままだ。だから私は、今も人肉を食って育ったシャコが食べられない」と語ってくれた。私は、戸口まで送ってくれる運転手さんに「まさに昭和史の生き証人じゃないですか」と言い、その夜は興奮して寝られなかった。

私は石原八束著『駱駝の瘤にまたがって 三好達治伝』を読んで以来、ずっと秩父宮と２・２６事件との関わりが気になっていた。宮さまのアルプス行きは、陸軍内部の不穏な動きから宮様を遠ざける為の方策だったと思っている。

陸軍士官学校時代、第一中隊第一区隊に淳宮（後の秩父宮）が、第二区隊に三好達治や後に２・２６事件の中心的役割を果たして刑死した西田税がいた。起居を共にし、自習時間を共有する中で、同期生の動向は宮様の身边に大きな影響を与えたに違いない。その後、三好達治は脱走して退校処分となり、三高・東大と進み、詩人として名をなした。詩集『艸千里』の中の「艸千里浜」の一節、「若き日のわれの希望と のぞみ 二十年の月日と はたとせ 友と われをおきていつちゆきけむ」には、共に阿蘇に登った同期生の運命を思う心情が込められているようだ。

私は、晩年の三好達治に会った（というより見かけた）ことがある。昭和三十年度の初め、当時駆け出しの編集者だった夫が、「婦人公論」の詩の選者をしていた詩人の元へ、投稿詩の風呂敷包

みを届けるのに同行、当時パトロン石原八束邸の離れに住む孤高の詩人の姿を垣間見たのだった。

あれこれ思いながら、次回会ったら何から聞こうかと胸を躍らせた私は、翌朝、歴史好きの弟に電話を入れた。弟は即座に言った。「ヘンな話だね。昭和13年生まれの僕が今年80歳になるんだ。昭和11年の2・26事件に兵隊だったとしたら100歳をとうに超えてる筈だよ」と。

記憶力抜群と思ったYさんも、やはり妄想の人だったのか。しかし、私がそれに気がついたと知ったら、彼は傷つくだろうな。どうしよう。そこで、私が出した結論は「この話、私がボケて忘れたことにすればいい」。翌週の入浴サービスで私は、待ち時間中、黙って週刊誌をめくっていた。

でも、私は不安で仕方がない。同じようなことを私がしていないだろうか。自分が書くことも、喋ることも自信がなくなってしまった。老いとは、悲しいものである。

西郷山

松本 恒廣

久しぶりに「山と溪谷」11月号を手にとってみました。別冊付録として登山バス時刻表なる200頁近い小冊子がついていました。これを利用して山に登る気持ちはまだあるんですよ。“四季をとおして歩きたい再発見・東京周辺の山100”という特集号です。

人気の山ベスト10として、1. 甲武信岳。2. 大菩薩嶺。3. 金峰山。・・・展望の山18。豊かな自然の山17。歴史と信仰の山20。都会の超低山1。岩の山20。まだある！東京周辺の山14。これで100山。このうち幾つ登っているのか数えてみると51しかなかった。西上州、伊豆半島、外秩父、奥久慈周辺では足が遠のくも無理はないです。

ここで目についたのが、東京の超低山として紹介されていた「西郷山 東京都」。これまで聞いたこともない山の名でありました。NHK テレビ日曜夜の大河ドラマ「西郷どん」に^{せご}関係ありそう
で気になったので、行ってみようと思い立ち、登山口？の東急東横線代官山駅に降り立ったのは12月4日の昼下がりでした。

渋谷川と目黒川にはさまれた台地状のこの周辺には、エジプト、デンマーク、セネガル等の大使館が並ぶ高級住宅街。旧山手通りを行くと左手に西郷山公園があった。標高36米、高低差約20米というこの山の頂はすぐ目の前でした。なんのことはない、いきなり山頂に立ってしまったのです。山頂の芝生を横切っていくと下から登山道が3本、上がってきていました。1本は後で数えてみたら95段ある階段状の急登。真ん中につづら折りのルート。そしてもう1本がこれも急な階段道。3本を登ったり下りたり、全部歩いてみました。どれも大体5分くらいです。



「目黒区みどりの散歩道」の説明板によると西郷山・目黒川コースとあり、江戸時代に大名庭園になっていたところを明治初期、薩摩藩の西郷隆盛の弟、^{つぐみち}従道がこの辺りの土地6万平方メートル(18,150坪)を購入。ここに兄、隆盛を迎えようとしたが、隆盛は西南戦争に敗れ、鹿児島で自刃。

そのため、従道の別邸となったとある。洋館、和館に池のある回遊式の美しい庭園で明治天皇も行幸したとのこと。洋館は現在犬山市の明治村に移築されている。政府側に立ち、兄と戦った従道は、その後海軍大臣、伯爵、海軍元帥となります。

芝生状の山頂は子供たちの遊び場、周囲のベンチはスマホに夢中の若者たちに占領されている。

「愛犬家の皆様へ」の注意書きがやたらに目につく。辺りには区制50周年を祝って鹿児島7町村から贈られた樹木をはじめ、花時にはさぞ見事であろう、桜の大木、シダレザクラ、オオシマザクラ等が見られる。又、山頂には巨大な桜島の溶岩が置かれていて、ウラ側に昭和56年公園になった由来がしるされている。鹿児島まで980キロメートルとのこと。



桜島の溶岩（大きさがわかります）

日暮れどき、ここからの夕焼けは見事だという。こんな場所がヤマケイに紹介されるなんて、思ってもみなかったことです。

下山は鉢山町から道玄坂を下って渋谷駅へ。

11, 489歩のお散歩でした。（写真提供：松本恒廣）

白神山地展望の山

福田 光子

小岳（1042.3m）の紅葉は初めてのこと、藤里町の白神世界遺産センターから約30km、その三分の二は未舗装の悪路を移動する。時間にして約一時間、ドライバーの苦労を察しながらも久しぶりの風景に見とれてしまった。

登山口には、県外ナンバーの車が二台あった。この付近はようやく紅葉が始まったばかり、整備された登山道は腐葉土のクッションでフカフカと足にやさしい。台風で倒木も目立つがよく処理され、ブナの樹林帯はいつ歩いても気持ちよい。沢水も落ち葉の間を縫うように流れている。樹間からは遠くまで見渡せる。千手観音ブナが大きく枝葉を広げ、王者の貫禄で威容を誇っている。晴れた空を見上げると雁が南下していた。この空の一角は昔から渡り鳥の行路、昔の人はそのことをよく知って名づけたであろう雁ヶ森はこの近くの山だ。山頂直下の急登を超えるとハイマツ帯、緩やかな尾根を一登りで頂上着、山ノ神を祀る小さな祠がひっそりと待っていた。ここは360度の眺望抜群。北側の手つかずの白神の原生林、多くを伐採されて痛々しい姿だった南面も半世紀を超える今は、鬱蒼とした広葉樹林帯に変わりはじめた。北側の自然遺産地域のブナ林、尾根から沢へ、山の斜面は急峻で厳しい様子が遠目にもわかる。この山頂からは人工物は全く見られず、どこまでも広がっている樹海は本当に圧巻だ。県内の山でも山頂から人工物が見られない山はもうここだけかもしれない。頻繁に登れる山でもないの、もう少しゆっくりしたいが、つるべ落としの秋の日は急がなければならない。帰りは八合目から新道と言われているブナの尾根を下る。黄葉のブナのトンネルが続く急斜面のつづら折りのトラバースルートを降りると壊れた林道へ出て15分ほどで登山口の管理センターだった。

地元のリーダーは「今度は新緑の頃、ブロッコリーの森を見に来てください」と誘ってくれた。

(注)：ブロッコリーの森とは、樹木がモコモコとブロッコリーのような塊に見える様子とのこと。

(10月10日歩く)

<報告>

12月15日、集会室で恒例の忘年会が開かれました。遠方会員では、新潟の吉田さん、松本から田村さんが出席され、暑気払いに引き続き近藤緑さん、山川さんもお出席。

懇親会に入る前に、富澤代表より、9月に行かれたアメリカの国立公園の写真を見ながら解説をいただきました。この内容は次号でお知らせします。

いつも気を遣っていただく渡部さん、川口さんからの手造りのお惣菜に、皆さんからお寄せいただいた「おもたせ」、それに日本酒・ワイン。かなりの量のお酒も結局ワイン以外は皆さんの胃に収まってしまったようです！

途中で全員の方から近況をお話いただきましたが、終始和やかな雰囲気です。親睦を深めることができました。会の二日後、近藤緑さんからお礼のメールがありました。「日頃ご無沙汰ばかりしておりますのに、皆様に歓迎していただいて本当に有難いことと感激いたしました。日本山岳会のクラブライフが、いまでもこのような形で続いていることを嬉しく思います。」と。

小林敏博臨時特派員からのトピックスです

会報155号(4月発行)に瀬戸会員から「50ヶ月連続登山の記」と題した一文を寄稿いただきましたが、さる12月8日(土)、その連続記録が60ヶ月に伸びたとのニュースが飛び込んできました。

この日小林会員とともに南高尾山稜に向かった瀬戸さんは、甲州街道から林道へと進み、三沢峠を経て草戸山へ。さらに四辻へと歩き高尾山口に下山したとのこと。

標高はさほど高くないものの、小さなアップダウンが連続するルートです。そこをほとんど休みを取らずに、4時間あまりで歩いたというのですから、年齢を考えると恐るべき体力です。(失礼)

これは、日ごろからトレーニングを欠かさない瀬戸さんの努力のたまものであり、敬意を表するところでもあります。三浦雄一郎氏がアコンカグアに登って滑る

とかいう話ですが、山に対する姿勢・意欲や目標感という点では同じだと思うのです。今回は通過点ということでしょうが、今後70ヶ月、80ヶ月と長く登山が続きますよう期待しています。

同行された小林さんは、この日のために写真のような横断幕を密かに作ってきておられました。この気配りも心憎いことでした。今後の節目の山行は呼びかけ山行的に募ってもいいのではないかと考えております。(荒井記、写真提供：小林敏博)

※こうした山行に限らず、会員が山岳会の内外を問わず活躍されている情報がありましたら、お聞かせ願います。インタビューの上、会報に掲載も考えたいと思います。



<60ヶ月連続山行達成の瀬戸会員>

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

初詣山行

室町時代創建の古刹・海禅寺に詣でてから青梅丘陵を歩きます。青梅丘陵は低山ですが細かいアップダウンがあります。ゆっくり歩きましょう。頂上では暖かい飲み物を用意します。下山後、丸石がご神体の石神社（いしがみしゃ）に立ち寄ります。「石神前駅」の由来となった社です。

期日：1月11日（金）雨天中止

集合：青梅線・二俣尾駅 改札口 9時40分

（参考：立川発8時56分 → 青梅駅で「奥多摩行」に乗り換え → 二俣尾駅9時39分着）

コースタイム：二俣尾駅→（5分）→ 海禅寺→（5分）→ 登山口→（50分）→ 名郷峠→（1時間）
→ 三方山（さんぼうやま）→（30分）→ 石神前駅分岐→（1時間）→ 石神社（5分）
→ 石神前駅

・歩行時間は約3時間30分です

申込み：1月7日までに下記へ

夏原寿一



* ストック必携。念のため軽アイゼンをご持参ください。

2月例会：「お話」

日時：2月25日（月） 14時～ 104号室

演者：小清水敏昌会員

演題：「山でのクスリ・家庭でのクスリ—知ってトクする正しい使い方—」

薬の専門家である医学博士、小清水会員より、上記演題でお話しいたします。ぜひ、お聞き逃しなきよう。

3月例会山行 春のにおいを感じに富士山周辺へ！

担当：小林敏博

日時：3月23日（土）

詳細は次号で案内しますので日程だけでもお含みおきください。

―― 編集後記 ―――

1月が穏やかだったと思っていたら、師走に入って一挙に真冬の寒さとなりました。風疹が流行っているそうですが、またインフルエンザの季節になりますね。お風邪など召されませんように。

今号は12ページとなりました。関塚さん、近藤さん、松本さんからのご寄稿に加え、秋田の福田さんから紅葉の山の便りをいただきました。長沢さんの文章とともに季節感を味わうことができました。小林さんには講演の感想をお願いし、報告を補っていただきました。平成最後の年末に、こうして多くの方からご協力を賜ったことで、安心して年を越すことができます。どうぞ来年もよろしく願いいたします。よいお年をお迎えください。（荒井正人）

<次号予告> 2019年2月25日発行の主な内容

報告：忘年会、1月初詣山行 その他寄稿・投稿など

※皆様からの投稿をお待ちしています